天蓋薩峠　作者

中里介山の思想

作木田

大菩薩峠　作者

中里介山の思想

柞木田龍善著

天心大菩薩会

著者略歴　**柞木田龍善**（たらきだ　りゅうぜん）

大正3年青森県八戸市に生まれる。

『大菩薩峠』作者中里介山に私淑し「西隣村塾」に学ぶ。

読売新聞に入社。旅行記者17年宗教記者4年など28年間勤務。

その間2度にわたり兵役に従う。昭和22年6月シベリア抑留より帰還復員。

現在「天心大菩薩会」理事。日本文芸家協会会員。

主な著書

『全国高原と湖の旅』実業之日本社

『日本の秘境』読売新聞社『中里介山伝』読売新聞社

『秘境歴史の旅』新人物往来社『修験木喰』佼成出版社

『中里介山と武術〈上下〉』体育とスポーツ出版社

『修験の山々』京都・法蔵館『シベリア捕虜記　赤い満月』叢文社

『日本超古代史の謎に挑む――日本・ユダヤ同祖論の深層』風濤社

『安徳天皇と日の宮幣立神宮』新人物往来社

写真第一集『後立山から剣岳へ』『日本神道』私家宝蔵版

『中里介山伝』復刻増補本＝以上三冊天心大菩薩会

など多数

文章・写真共無断転載を禁ず

大菩薩峠　作者　中里介山の思想

昭和六十三年（一九八八）十一月十六日　第一刷発行

定価　五〇〇〇円

著者　柞木田龍善

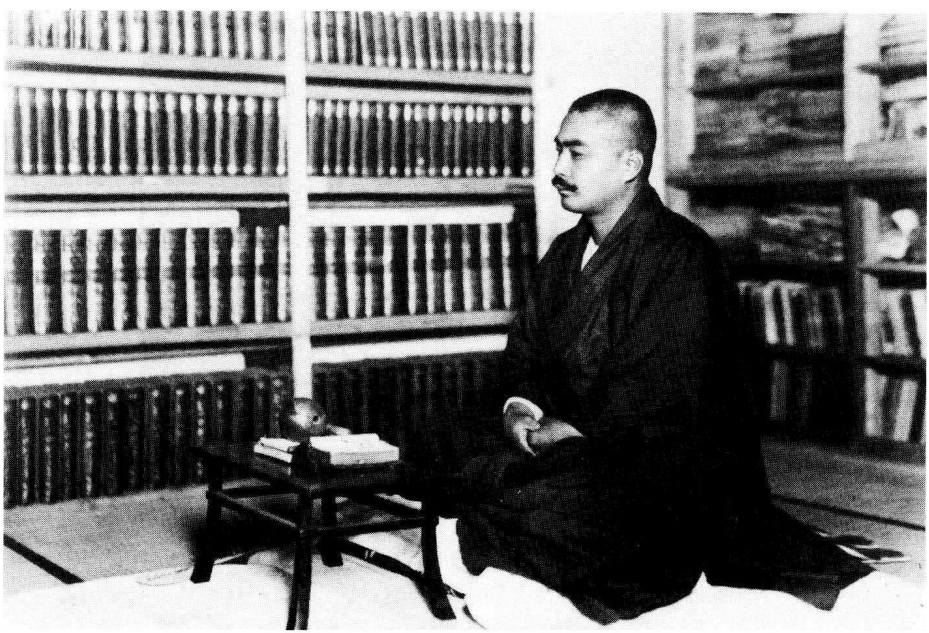
発行　天心大菩薩会

東京都杉並区高井戸東二丁目二二ノ一七（〒一六八）

電話　（〇三）三〇二一八二五九

郵便振替　東京一―九五五九一

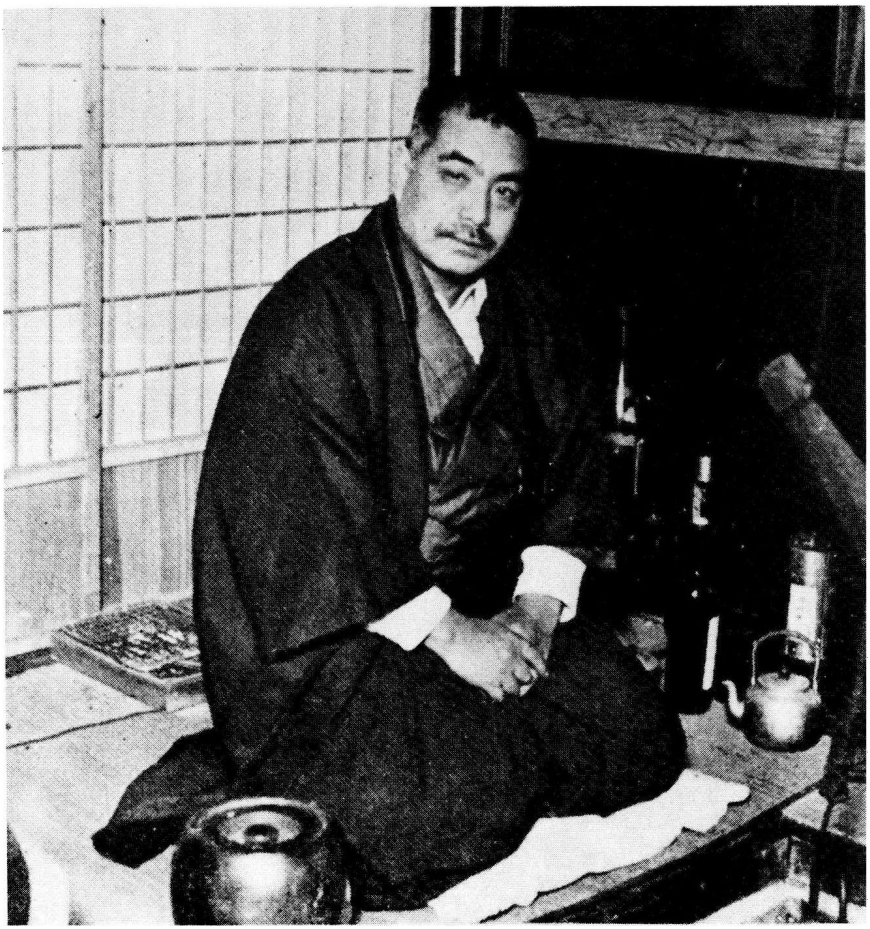
上に菩提（道）を求め、これを衆生に教示して行く、これは菩薩の仕事である。



奥深さを感じさせる見事な介山の結跏趺座（昭和５年頃、大菩薩峠記念館にて、46歳）

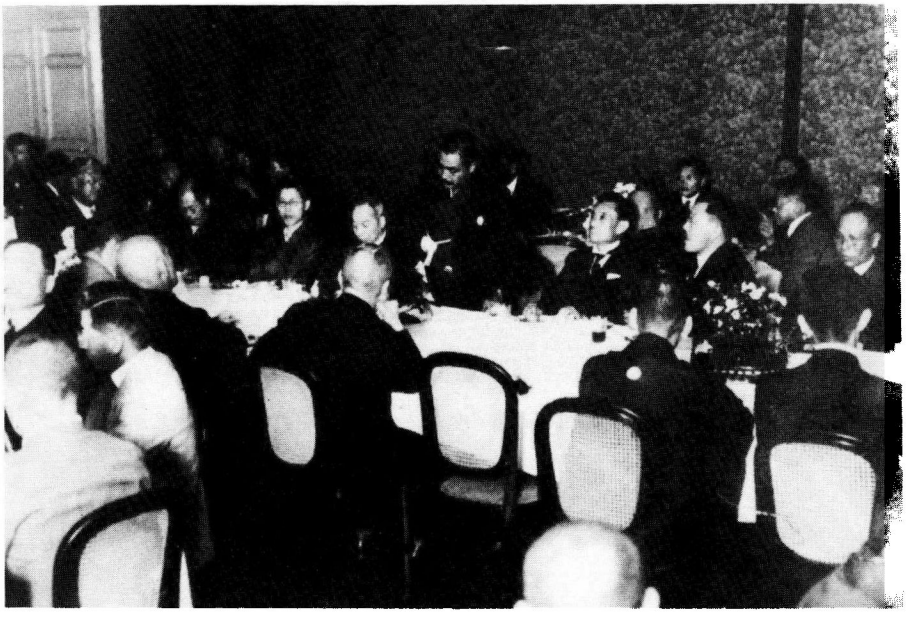
介山の母ハナの笑顔の写真はこの一枚だけ。抱いている児は、桜沢善平、久夫妻の長男、介山命名の善之助君。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



ふだん着のままの介山、耕書堂の居間で。（昭和18年、翌19年逝去）

「大菩薩峠」日活映画化決定で明治神宮に参拝す。向って左から二人目介山、右端、松方公爵日活社長。



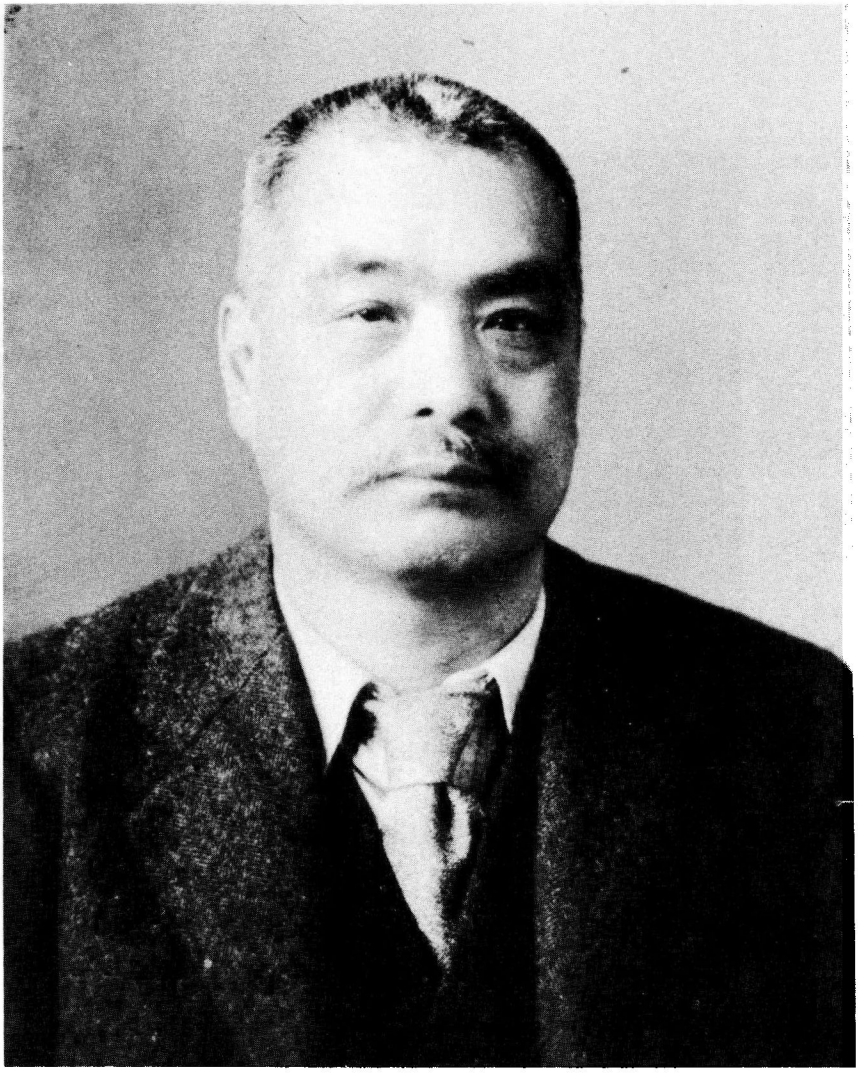
大毎、東日に「大菩薩峠」続編掲載の披露宴を東京会館で開いた。（昭和２年11月）

昭和５年「大菩薩峠記念館」完成と共に「西隣村塾」を開いた。塾生たちと共の介山。

耕書堂、介山の居間。介山が奥にいるような感じ。（今はない）

奥多摩、御嶽山麓、漆の窪の山中に自分の修行場として建てた小滝道場での介山。

フランスへ日本武道文化使節としてパリとニースでの武道大会から帰国直後、介山の墓前に圓心流武術を奉納演武された同流師家田中普門先生。



昭和14年アメリカ遊学で、パスポート用に撮った写真だが間に合わず、パスポートには古い写真を貼って行った。

大正６年介山は母ハナと京阪に旅行、高野山大門で。初恋のきせ子の弟久保川延平の撮った介山親子ただ一枚の写真。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

膨大な介山の大菩薩峠全18冊、夢殿、法然、黒谷夜話
などほとんど全著作集に近い本が並んでいる。

親の代から介山自身も並々ならぬお世話になった羽村一の名家、指田茂十郎家に介山が自筆の「山水」を持参し、永年にわたるお礼を述べている。

大菩薩峠作者中里介山の思想

序文

畑中一美
（天心大菩薩会理事）

私は、介山とは、戦時中の昭和十八年、信州軽井沢、千ヶ滝の介山の山荘〝西来荘〟に、同郷の北原謙司さんと二人でお伺いして、十日間ほど、介山と寝食を共にして、「隣人の友」の発行、手紙などの代筆、発送などをお手伝いした――これだけで介山署名の色紙を戴いている、今では介山の謦咳に接した数少ない生存者の一人であるが、

柞木田さんの介山に関する本、たとえば昨六十二年十月に出した、全面的に書き改めた復刻増補本の『大菩薩峠作者中里介山伝』を受け取るや、ざっと一読して、以前から感じていたが、自分をさらけ出して生きてきた介山と柞木田さんの気が通じ合った息吹きが、ゴロ〳〵といっぱいに本から吹き出していることである。

柞木田さんは介山に、「弟子のはしくれにして頂きたい」旨の手紙を毛筆で書いて出したところ、思いがけなく介山から、自筆の「東京から十里ほど離れた山奥で、自炊生活しながら悠々修行する覚悟があったら来てもよい」との万年筆書きの御返書を受け取り、勇躍介山の西隣村塾に飛び込んだ人である。

昭和九年六月のこと、という。以来、現役の兵隊にとられ、日中戦争に召集され、今次の大東亜戦争では、赤紙で昭和十七年関東軍に渡り、終戦の二十年には、ソ連の捕虜としてシベリアの収容所に抑留され、二十二年に

帰還復員、読売新聞に復職、記者生活にもどる。

こういう経歴の柞木田さんが、介山の本を手がけた第一作は、昭和四十七年三月、読売新聞社から出した『中里介山伝』である。

読売新聞在職中は、記者の仕事以外はできなかったと見えて、定年退職後三年目に成した仕事であった。

次いで同五十四年七月には、『中里介山と武術』上・下二冊を、月刊『剣道時代』に連載した後、出版している。

そして昨六十二年十月には、『大菩薩峠作者中里介山伝』として、十五年以前に、さらっとした書きっぷりで出した『中里介山伝』を、こんどは中身濃く、全面的に書き改めた復刻増補本を出した。

その一年後の六十三年十月下旬に出る予定の『大菩薩峠作者中里介山の思想』は、柞木田さんの介山シリーズの総まとめ、ということになる。

柞木田さんは、昭和九年にはじめて介山に接して、西隣村塾の塾生となり、介山居士の膝下にあって、その活きた指導と薫陶を受けて以来、五十四年の歳月を経たことになる。

柞木田さんは、今年満七十三歳、思えば生涯、巨人中里介山と取っ組んできたわけである。

私は「大菩薩会」の会員になる以前から、北原謙司さんと共に、柞木田さんとおつき合いして、二十数年になる。こうしたことから、序文をご指名して下さったのであるが、私は不敏をも顧みず、一文を草してご依頼に応える所以である。

柞木田さんは、西隣塾にあって、介山から愛された横顔の一端は、『大菩薩峠』第十四冊《恐山の巻》の冒頭から登場する南部藩の短躯矮小の居合の名人、柳田平治なる人物のモデルが柞木田さんであると伝えられていることからでもわかる。

柞木田さんは資性剛直、正義感の強い、東北人特有のねばり腰の人、この柞木田さんが、師介山に寄せる温か

い執念の深さが、この『中里介山の思想』に一貫して凝集されていることを、その見本刷りを拝見して私は感得した。

私は、重厚な小説『大菩薩峠』は、大正二年発行されて以来約八十年間、おそらく一千万人を超える人々に愛読されている、と思うが、愛読されている根本原因は何かというと、三次元（天上界、人間界、地獄界）の世界を包摂する大きな視野に立って書かれているからだと、かねてから思っているが、柞木田さんは、その世界を〝霊界〟として、作者介山の周辺に、仏教やキリスト教などの信仰厚い師友の幾人かがあったことや、それらの人々との交流の中にあって揺れ動く若き日の介山の思想が、次第に深い信仰の世界へ進行して行ったとして、

この『中里介山の思想』は、その清き交遊の姿を伝えてくれているが、中でもそれらの中の一人高田集蔵さんとの交流の一端を介山の『孤立者の通信』に載せられた高田さんの例を挙げている。

高田集蔵は、霊格の高い方であったが、介山もまた集蔵に劣らない高い霊格の人であった。この高い霊格者同志の〝出会い〟の場を実に見事に抽出している。

次いで介山は、「聖徳太子の研究」に入って大きな収穫を得、介山の思想がようやく終局を迎える直前にきている様子が、簡潔な柞木田さんの文章で、よく描かれている。

『大菩薩峠』の思想は〝間の山節〟であるの〝無常観〟であるのと、仏教を知らない作家や文芸読物の解説者らが、知ったかぶりをして、こともあろうに、大新聞の朝日新聞や大出版社の新潮社で出した本に書いてあるが、こんど柞木田さんが、他では蒐集できないような多くの貴重な資料を駆使して、懇切丁寧に、誰にもわかるように、介山の発見した〝親様〟そして、黒住教、丸山教、金光教など民衆宗教の入り混った、隣人より村落へ、村落より都市へ、都市より国家へ、国家より人類へ、人類より万有へ、万有より本尊へ、の介山独自の華蔵世界——つまり、華厳曼陀羅である、と結論している。

これに対して、それは異う、という人が出てくるかも知れない。その人が多くの人を納得させるだけの理論を以て説明してくれば、客観性はその人の上にあることになり、柞木田さんの見解が誤っていたことになる。

学識に乏しい私はこれ以上のことをいう力はないが、柞木田さんの書いたことは、田中智学翁や介山自身の書いた物に、抵触するものではなく、むしろ裏打ちしているようなものだから、間違いはないと私は信じる。

前回は、徳川家康で知られる大作家山岡荘八先生と、禅の世界的師家だった中川宋淵老師の序文があったが、この両先生は今はすでに幽明境を異にしているので、前述した結びつきから序文を書くお鉢が不肖の私に回ってきたので、やむなくペンを走らせたのであるが、一介の小学校教員だった私には、荷が重かったが、とにかく未熟ながらこのように責任を果した次第である。

昭和六十三年八月二十六日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com